

## 長い学生生活と放浪癖

歯学部  
歯学科

准教授 橋本 正則



学部学生時(九州大学)はバイク好きで日本各地を徘徊する生活を送っていました。バイトをしてツーリング費用を工面したり、バイク用品を買うということに夢中になっていました。バイクはオンロード(Kawasaki GPZ400R)、オフロード(Kawasaki KDX250)の2台を所有。バイクに荷物をつんで、時にはテントも積み込み福岡を始点



愛車Kawasaki GPZ400R

ひとに語れるような学生生活ではなかったのですが...

心理科学部  
臨床心理学科

講師 松本 由起子



学生時代はいわゆるモラトリアムだった。大学が放任主義だったのをいいことに、授業もそれほど出ていない。ではなにをしていたかという、なにもしていなかったもので、これといった話がなく、今回も2枚写真を添えるようにとのことだったが、適切な学生生活をしていなかったため適切な写真が存在せず、写真なしとなった。

当時のシステムでは、学部の3年になる段階で専門を選ぶことになっていた。が、モラトリアム中で、ここに行きたいといった希望があるはずもなく、自分で自分の将来を決めるようなことはもちろんしなかった。ので、学生相談室に行って、この授業がおもしろかった人はなにを専門すればいいのかと尋ね(たしか「生活科学2」という科目

として日本列島を南は沖縄・南波照間島から北は宗谷岬、礼文島まで2周したのがきっかけで放浪癖が身に付いた気がします。

大学卒業後、2年間の研修医生活を経て大学院(北海道大学)に進学。大学院の入学試験と合格発表があり、入学の手引には「飲酒時の注意点」とか「恵迪寮の入寮案内」なども同封されていて、“いい年してまた学生になったんだ”と思った記憶があります。さらに学生証で学割が効いたり、大学院講義なる授業などもあり、嬉しいやら悲しいやら、また4年間の学生生活が始まりました。大学院では比較的時間が自由であったことから、学会がらみや個人旅行でのアメリカ、中国などへの海外放浪?が一つの楽しみでした。

大学院修了後、岩手医科大学勤務を



アムステルダムのカフェにて、イタリア(右)、ペルー(中央)の大学院生と私(左)。

経て2年間の海外研修の機会に恵まれ、アメリカ、オランダ、ベルギーの3大学に留学することができました。アメリカ(ジョージア医科大学)はポストドクが主体で大学院生と交わることは少なかったのですが、オランダ(アムステルダム大学)のラボは大学院生が主体でポストドクは私だけでした。イタリア、ペルー、エジプト、イランなど世界各国の大学院生たちと大学院生部屋にて机を並べ、また学生に逆戻りした気分になりました。留学中も放浪癖が再燃、学会での出張を含めてアメリカ各地、ヨーロッパ12カ国にアクセスすることができ、大きな思い出となりました。

## 私の学生時代

今、本学の教壇に立たれている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。

今回は橋本准教授と松本講師のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

で、ラカン派の先生がフロイトを読ませる授業だった)、教育学部の臨床心理専攻だろうと言われたので、そうした。そしてある夏休みが終わった頃、就職活動も終わっているらしいと気づいて、では大学院へということになった。その大学院が実質的なカウンセラー養成所だということは、ちょっと考えればわかったはずだが、その時は考えなかった。修士1年の冬、クライアントを持つことが避けられない情勢になってはじめて、臨床心理というと人の治療にあたらなといけなのだと悟り、道を誤ったことに気づいた。が、引き続きモラトリアム中だったので手を打つでもなく、時は流れ、修士も終わりに近づき、それまで指導してくださっていた先生が退官なさることになった。当時の所属で、臨床と関係ない文献研究を指導していらしたのはその先生だけで、その先生がいなくなれば、臨床関係の論文でないと指導を受けられなくなる。そこで

やっと、ここにいても未来がないとわかった。が、相変わらずモラトリアム中だったので、どうしたものかと思いつつ、そのまま博士に進んだ結果、どうにも辻褄が合わなくなり、別の大学院に移動したり、語学を覚える必要に迫られたりすることになったのだが、字数も尽きてきたので後は省略する。

とにかく長く緩慢な学生生活だった。こうして振り返ってみると、思っていたよりひどい。その時は、みんなそんなものかと思うともなく思っていたような気がするが、今、学生を見る立場になってみると、とてもみんながそうだったとは思えないほどひどいような気がする。いまさら反省してどうなることでもないが。